

Bamboo Wireless.

1 (古屋司教認可)

カトリック教区時報

京都



クリスマスを迎えて

古屋司教

愛する教区の皆様、クリスマスを心よりお祝ひ申し上げます。ベトナムの馬屋に生まれ給ふた幼子について「汝は我子なり、我今日汝を生めり」(詩篇二・七)と予言され、その使命について「汝は限りなくメルキセデクの如き司祭なり」と(詩篇一〇九・三)予言されて居りました。神の子は人となり、死に到るまでの従順によって、神への反逆である人々の罪を贖ひ十字架の祭壇で贖罪の犠牲を完成し、司祭的使命を全うなさいました。神と人との和解は成立し平和が再び参りました。

使徒パウロは申して居ります、即ち「メルキセデクの名は—義の王にして、次にサレムの王、即ち平和の王なり」(ヘブレオ七・二)と。平和と云ふ言葉ほど現代人の胸を打つ言葉はありません。再度に渡る大戦の悲惨を経験した人類は、救ひがたい愚かに、ベトナム平和への発言をなし、平和への努力を致して居ります。南ベトナムのベトコンでさえも、パウロ六世のクリスマス休戦のきっかけに好意を示し、賛意を明かにして居ります。

アメリカに於いても、偉大なカトリックの政治家、故ケネディ大統領も、共産圏との激しい対立の時代にさえ、共産圏の困窮にこたえて小麦を輸出し、フルチショフ氏より感謝された様に、平和への努力を進めて居りました。今も其の弟であるケネディ氏はアザア和平への努力をし、多くの支持者を得

な者を除いて、全ての人々が平和を望んで居ります。

ヨハネ二三世は、回章「地上の平和」を公布なさいましたし、又其の後継者であるパウロ六世も、一九六五年十月四日、国連創立二十周年に際して、平和使節として自ら国連に赴き、全世界の平和のために心からの訴へをなさいました。其の旨を理解して、ソビエートのグロムイコ外相はローマを訪ね平和共存の約束を行ひ、カトリックの代表的政治家であるフランスのドゴーリ大統領を訪ね平和の誓ひを行ひました。ドゴーリ大統領もモスクワを訪ね、平和の話合ひを行ひ、ヨーロッパカトリック諸国と共に産諸国との間に平和な空気が交流する様になりつつあります。アジャを訪問したドゴーリ大統領はパウロ六世教皇と同じ様に、ベトナム平和への発言をなし、平和への努力を致して居ります。南ベトナムのベトコンでさえも、パウロ六世のクリスマス休戦のきっかけに好意を示し、賛意を明かにして居ります。

神の御子キリストのもたらし給うた平和への道は、神の子が「己をなき者として奴隸の姿をとり、人として生まれ」、罪ある人々と喜び悲しみを共感し、信ずる者を神の養子、己が兄弟とし、「世嗣^{ワシツ}の光榮」に与らせると云う「神の子となるべき権能を授ける」(ヨハネ一・十二)方法によつてありました。

平和とは戦力や経済力によつて、他を征服するとか、支配するとかによつては齊らざるものではありません。それはあまりにも古びた思想です。現代の民族の欲求は、文化や科学、社会生活の進歩にあります。民族相互の交流によつて理解を深め、文化の遅れた民族を援助し、全ての民族を文化の恩恵に浴させる事によつて世界平和が達成される事でせう。其處に於ては皮膚の色や、如何なる外見の優劣による差別もなく、人間の尊厳性に基く相互尊重の手を差し延る事により社会生活の平和が保たれる事でせう。

クリスマスを迎えて、先づ私達の周囲に平和を置きませう。家庭生活に於て、職場に於て、キリスト教徒は平和の使節でなければなりません。又、其の祈りによつて、世界平和を破らんとする頑迷なる人々の心に、正義と愛に基づく良識が与へられる様に、神の御前に乞願を続け、私達も世界和平への努力を致しませう。

て居ると言はれます。

使徒パウロは、全てのキリスト者に呼びかけて居ります、「汝等一体としてキリストの平和に召されたれば、其の平和をして汝等の心を司らしむべし」(コロサイ三・十五)と。

編集の言

S · H 記

敬愛すべき古屋司教様の意向によりまして、機関紙として教区時報を発行する事となりました。此の時に当り「バンブー・ワイアレス」なる固有の名称を採用致す事と致しました。京都が独立の教区として成立した時、初代教区長バーン神父様の宅を訪問した編集子に手渡されたのが「バンブー・ワイアレス」なる教区紙でした。大の親日家であったバーン神父様の威徳をしお所縁となれば幸と存ります。

今日の教区の発展は過去の教区の歴史を除外して成立するものではないであります。過去の多くの司祭、修道者、信者諸氏の払った犠牲と祈と苦業と働きの上にこそ、今日の教区の発展が実を結んだと云へましょう。愛国心と云うものが、一国の歴史の中に登場した多くの人物の努力によって築かれた文化、その文化の恩恵の中にはぐくまれた人々の持つ祖国への愛である様に、教区の歴史先人の持つ努力を無視しては、正しい京都教区への愛を持つ事は出来ないでしよう。

教区機関は教区の全信者を愛によつて一つの群となす働きを持たねばならないでしよう。その意味で各教会の諸行事で他教会の信者の心温まる行事をニュースとして、出来れば写真をもそえて編集室へ御送り下さるよう、お願ひ申上げます。

他方、布教活動の一翼を荷なはねば

ならないでしよう。多くの体験を持たれた方々の経験談を、他の方々の参考となるよう、自発的に投稿下さいます。

信者の使徒職への参加の問題として、各教会には熱心な方々が、諸種の会合に所属されて、祈りに、犠牲に、実際活動に活躍なさって居られます

が、他方信者となつて新しく充分にカトリック精神を理解出来ないで、諸種の疑問に迷つて居られる方々の為に、その疑問に答える事、又信者の内的生活への簡明な話などを取扱つて行きたいと思います。外的活動は内的な全きキリスト者として始めてよき実を結び、「地の塩」、「世の光」として社会に広く影響を与へる事が出来ると思われます。

各教会には、例えば三条教会には

教会再合同運動のゆくえ

平間神父

ヴァチカン公會議以後、世界的な動きとして新教徒とカトリック教徒との間に合同の為の集りが持たれる様になつた事は喜ばしい限りであります。特に和合を愛する日本人がキリスト教を受入れるに当つて、感情的な迄に対立した欧米キリスト教の姿を其の儘受継がねばならない事は一つの悲劇でもあ

ります。神の御子キリストの別離の悲しみの中の祈、「我祈るは—彼等が一ならん為なり」(ヨハネ十七・廿一廿三)との言葉を知るならば、キリストの「愛に止る」(ヨハネ十五・九)事を喜びとするキリスト者は、神の子の意志に対して無感心で居る事は出来ないでしよう。

自らが其の一員である教会を心から愛いて、あえて闇を見ながらも尚かつ光を信ずる者、反省的な者のみが、教皇が公會議に期待された教会革新に向う事が出来るのであります。教皇が公會議に期待された教会革新に向う事が出来るのであります。

洗礼によってキリストの神祕体の一部とされた私達各自の内省により、自分を改革する事が教会革新につながるものとして、先づ始めねばならない事なのでしょう。

教皇は「離れた兄弟」と呼ばれまし

「イクトウス」なる教会紙が月々出されて居りますように、何処の教会も、「心のともしひ」を利用して、時間のある方は、カトリック新聞で主要なニュースを知り、数多い単行本、雑誌に限定を受けます。商社の広告紙でないよう、古びた小ニュースを並べるでは存在の意味もなくなります。

信者の中には忙しく、カトリック出版物に目を通す時間もない方々も居られましよう。その方々の為に、簡潔に容領よく精神を捉へる事が出来るよう話の貢も設けたいと思います。此のような趣旨を御理解下さいまして、諸氏の御投稿を御待ち致します。

電灯の発明者トマス、エジソンは京都の竹を用いて家庭に光を賄らしました「バンブー・ワイアレス」が信者の家庭に光をはこぶ事が出来ますように。

ヨハネ二三世の言葉によれば、「公會議的主要目標はカトリックの信仰の成長とキリストの民の道徳の眞の革新を促進して、教会制度が我々の時代の要求と条件により良く適合する様にする事」(回勅「アド・ペトリカテドラム」エニスの司祭への手紙)である。ヨハネ二三世の見解では、分離しているキリスト者達の再合同はカトリック教会の革新にかかるて居り、分離せるキリスト者のカトリック教会への「復帰」(改宗)を迫る問題ではなかったのです。カトリック教会が健全に現代化された時、「見て下さい。兄弟達よ、これがキリストの教会です。我々は主が欲しがれました通りに教会が常にあります様に、帰郷に開かれた道です。お出で下さい——あなたの父祖の席であつた席を再びとるために」。(イタリアのカトリック・アクション教区議長に対する挨拶)

と分離せる兄弟達に言う事が出来ると申して居られるのです。

た。嫌惡の情をもつて「プロテスタント」と呼ぶ事はなくならねばなりません。「キリストの建て給うた教会」、「聖靈が世の終り迄導き給う教会」に抗して分れた者は、聖靈を受け、成義の恩恵を受る事が出来ない等の狭い考へはあとを断たねばならないでしょ。う。「神は偏り給はず。いづれの国民にもあれ、之を畏敬して義を行う人は御こころにかなう」（使徒行十三四）のであって、「聖靈の恩恵は異邦人にも注がれる」（使十・四五）のであります。現代の新教徒は自づから教会に抗したのでもなく、まして日本人の新教信者は善意の人々なのであります。

日本の新教の人々がアツンデの聖フランシスの「小さき花」を邦語訳で紹介したのは五十年も前の事で、字の読めなかつた小生は毎日一つづつ話を読み聞かされるのを楽しみと致して居ました。日本のカトリックの側の邦語訳は大方三十年遅れ、新教の信者の方がフランスをよく理解し崇拜して居られました。イミタチオ・クリスチも同様に、カトリック信者が邦語で読むずっと以前に新教の人々は其の精神を崇拜して居られたのです。「モロカイの聖者ダミエン」としてカトリックの神父の話が新教の牧師さんにより紹介され、本が出版されたのは四十余年前のことでした。カトリック側では「福者ダミエン神父がカトリック教会から「聖人」と呼ばれる為には莫大な経費と時間をかけねばならないでしよう。神の御子

キリストが「真理の中に——己を聖ならしめ」（ヨハネ十七・十九）給うた如く、ダミエン神父はモロカイ島で神の御望みを知り、生涯を犠牲として捧げつくした意味で新教の人々は「聖者」と呼んで居るのでしよう。之等の事の中に、日本の新教徒の善意を読みとる事が出来ましよう。今は故人となられた京都の仏教の高僧も中世カトリック神秘家を崇拜し説教の中でしばしば紹介して居られたのも五十有余年前の事でした。京都に生った人であれば誰でも之等の人々の善意を知つて居る筈であります。カトリック信者の愛も信者間のものとして限らずに愛の境界を取去らねばならない時が来ました。全ての人の救済される事を望まれる神は、「まことの宗教を、やむを得ない事情から知らずに」——善意の——カトリック教会の外に居る人々であつても、永遠の救を獲得する事が出来る」とピオ九世が明かに述べ居られる事に注意致しましよう。

の姿チャリティとラブを教えて居ります。キリスト者であり乍ら「己を愛する人を愛する」感情的愛ラブに基く新しい団決を以て、神の教会内に派閥を形成する人々、それは超自然的目的の為に集団を作る修道会の様な団決とは異質のものであり、使徒パウロが「肉的人物であって、小兒」麻痺的で、本能的自然的愛によって歩む人（コリント前、三・一—三）として示す處の非キリスト教的世俗的愛の姿であります。此の様な愛が教会位階制度の組織の中に入込んで来る時、神の教会は世欲的臭氣で満たされ、「聖靈により注がれた神の愛」（ロマ・五・五）に生きる「心の矛盾にして謙遜な人々が姿を消さねばならなくなります。「燃ゆる焰の中から聖靈は鳩の姿を以て天に帰つて行つた。翌朝、焼け爛れたジャンヌ・ド・アルクの死体がセーヌの流に漂つて打負かされた事を物語つて居ります。ローマ教会は此のフランスの田舎娘に「聖人」の称号を贈る事を忘れました。

体に属するキリスト者の各々に悪魔的靈感によつて働きかけて居るのであります。使徒パウロは「如何なる靈により導かれて居るか反省せよ」と注意を喚起しています。惡魔の靈感は原罪により強くなつた人間の本能的欲望——食欲、性欲、所有欲、権力欲、名譽欲、集団欲、遊戯欲、等の衝動を刺激して誘惑をかけて来ます。「石に命じてパンとならしめよ」、「権力と榮華を一与へよう」とか神の言葉の誤った解説を持つて迫つて来ます。人たるキリストは聖書の正しい解説を以て之に答へ給ひました（ルカ四・十一）

ユダの悲劇の生涯はパウロの云う「肉的愛」の領域に留つて居た為と考へられます。他の使徒と共にユダもキリストの宣教を助け、「惡魔を逐ひ病をいやす能力と権利を授かり」（ルカ九・二）巧に教を述べ、奇蹟を行ひ、經濟的能力を見込まれて使徒等の会計を与つて居ました。然しどバニアに於てマリアが高価なナルドの香油をキリストの足に注ぎ、髪毛で拭つた時、ユダは「何故、此の香油を三百デナリオに売つて貧者に施さなかつたのか」（ヨハネ十二・一以下）と申して居ます。マリアの心が罪を痛悔し、本能的所有欲を捨て去つて神への愛に飛翔し始めたのに対し、ユダは物質への愛着と肉的愛の領域から飛躍する事が出来ないで居たので、所有欲に負けて銀貨三十枚でキリストを売り渡す事になりました。

使徒パウロは申します「例へ予言をしても、学問的に勝っていても、奇蹟を行つて程の信仰を有して居ても、全財

産を貧者に分与へる愛徳を実行して、（コリント十三）「聖靈により注がれた愛」（ロマ五・五）チャリティがなければ、「鳴る鐘」の如く、宣教の勵きをしてもキリスト教的生命がない事を教へて居るのでしよう。キリスト教徒として生活しても「日々己を捨る」、本能の欲望に基く行為を完全に捨る事の努力なしには、「愛に於ける完全」に到達する事が困難の様です。使徒の生涯を見ても、聖靈降臨の日に到る迄の姿は「誰が一番偉いか」「神の国が来た時、キリストの左右に坐させてほしい」「全てを捨ててキリストに従つたから如何なるむくひを得られるか」——「キリストを愛する、共に死のう」と云い乍ら決定的な時に到ると「キリストを知らない」と云つて自己生命の安全を計る——現世的肉的な愛の段階に居る事を福音書は示して居ります。

に対しても礼節を失はず、自己の利益よりも隣人の利益を計り、怒らず、罪人呼ばはりせず、不正や罪を喜ばず、常に真実を述べ、忍耐強く」、「人に對して依怙する罪を犯さず」(ヤコボ二・九)、啓示された教であれば「何事をも信じる」(コリント十三・六)、柔軟にして謙遜なキリストの姿にならう者となりましよう。キリストは「日々己を捨てる」事を、亦パウロは「旧き人を捨て、新しき人を着よ」、「キリストを着よ」と種々の言葉で肉的・感情的愛の段階を去り靈的・知性的愛の段階に生き、神の求め給う善行と愛徳を実行する様に教えて居るのでしよう。

全てのキリスト者が「注がれた愛」、「敵をも愛する愛」に生き始める時、キリスト教会の一一致が実現する事でしょう。其の時、信仰内容の相異は消え去り、全世界のキリスト教徒はキリストの下に一つの群となり、キリストの御望みが完全に実現される事でしょ

天主堂寂別の思ひ

フランス外国宣教会のビリヨン神父様によつて建てられた天主堂との別れの日も近づいて来ました。新しい聖堂の設計が出来上りました。

天主堂が設立された頃は、河原町周辺の環境は決してよいものではありませんでした。その為に近づかない人々もあつた様です。河原町通りが開設されてから教会は京都の中心的繁華街に高くて十字架をかかげる様になりました。

う。教会再合同の実現に必要な愛とは靈的理性的愛であって、先づキリストの肢体なる信者各自の「内面の人としての完全」への努力と篤き祈りが必要な手段なのでありますよう。

「靈に従ひて歩め」と使徒パウロは叫んで居ります。原罪の絆である本能の諸欲より、恩恵によつて解放された「真理による自由」（ヨハネ八・三二）を享有した魂、愛と正義の道を歩む魂こそ常に靈に従う魂でしよう。其の愛は、全ての被造物に及ぶ境界なき愛にまでひろがる事でしよう。キリストを迎えたザケオの魂は正義と愛に於て生れ変りました。「今日救を得た」（ルカ十九・九）とキリストは申して居られます。救はれた魂は靈的愛の道を限りなく歩んで行く、常に神と共に居る魂の事なのでしよう。

「神は愛にて在す—愛に止る者は神に止り奉り、神も亦之に止り給う」（ヨハネ四・十六）

のゴシック聖堂は誠に珍しいものと云はねばならないそうです。

思ひ

布教の成績も次第に上つて行きまし
た。どれ程多くの魂が淨められ、祈
ち、聖歌合唱に宗教的莊厳さをかもし
出します。人々の心を天に向はせるゴ
シック様式のすばらしさを京都人は讚
美致します。時代の波が此の天主堂の
姿を消し去つても人々はいつまでも其
の美と莊嚴を讃え伝へる事でせう。

り、永遠の生命へ旅立つて行つた事でせう。設立者の神父様、資金を援助された、特にフランスの二家族の恩人の方々に日本人として篤く感謝せねばならないでせう。

イグナチオ、ロヨラは祈や默想の時、部屋を暗くする事をすすめて居りますが、強い光がステンドグラスでさ

えぎられた、ほの暗い此の天主堂は祈る為にはふさわしい場所でした。心静かに祈る人々の姿は他教会よりも多く見受けられました。